J.S.バッハ:《無伴奏チェロ組曲》より

J.S.バッハの《無伴奏チェロ組曲》(全 6 曲)が書かれた年代は、ケーテン宮廷楽長時代(1717-23)の前期とされる。各組曲は「アルマンド/クーラント/サラバンド/ジーグ」の 4 つの舞曲を基本としながら、第 1 曲に「プレリュード(前奏曲)」を、ジーグの前の第 5 曲に「メヌエット/ガヴォット/ブーレ」のいずれかの流行舞曲を置く構成になっている。本日は 6 曲のなかから第 1 番〜第 3 番までを、モダン・チェロとバロック・チェロの弾き比べでお届けする。

第 1 番

ト長調というチェロの運指に合った調性が、伸びやかな響きを生み出す。冒頭のプレリュードは本組曲中もっとも有名な楽章で、間断なく続く 16 分音符の流れがその背後で進む和声を浮き彫りにする。第 2 曲は安らぎに満ちたアルマンド、第 3 曲はイタリア型の急速な 3 拍子によるクーラント、第 4 曲は優雅なサラバンド、第 5 曲には 2 つのメヌエットが配され、第 6 曲の軽快な短いジーグで曲を閉じる。

第 2 番

ニ短調という調性は、音楽を内省的な方向へ導く。第 1 曲プレリュードは、和声よりも旋律そのものに重点が置かれている。第 2 曲は高度な技巧が要求されるアルマンド、第 3 曲のシンプルなイタリア型クーラントを経て、第 4 曲は引き伸ばされた旋律に和音が重なり、憂愁を湛えた横顔を見せるサラバンド。第 5 曲の 2 つのメヌエットでは、主調の第 1 メヌエットがニ短調、第 2 メヌエットがニ長調で、古風な響きを醸す。第 6 曲のフランス風ジーグは、規則正しい 8 小節の楽節構成による。

第 3 番

第 1 曲プレリュードは、16 分音符が淀みなく流れるスケールの大きな音楽。第 2 曲は、軽やかな愛らしさを感じさせるアルマンド。第 3 曲は、音階的な分散和音とスラーで奏されるイタリア型クーラント。第 4 曲は、典型的なサラバンドのリズムに旋律が勝っていく瞬間が美しい。第 5 曲ブーレは、演奏会用の小品として奏される機会も多い。第 6 曲は、終曲にふさわしい堂々としたジーグ。